

パネルディスカッション 「機能的地域資源としての大学の役割」

パネルディスカッション 「機能的地域資源としての大学の役割」の趣旨

松田亮三

(産業社会学部教授・人間科学研究所長)

最初に、「機能的地域資源としての大学の役割」に関してパネルの趣旨をご説明いたします。

大学は知の拠点であり、そのための研究者、施設があり、図書館をはじめとした情報が集中する組織でもあります。今、大学のあり方は厳しく問われています。学問は学者のためのものだけではありません。大学は、公的なお金によって存立しています。大学独自の資源だけで成立しているのではなく、社会からいろんな資源をいただいて成立しています。そのような中で、社会で生じている問題にどう答え、どう対応していくかが問われています。

人間科学研究所は、この間、対人援助の領域を重視して、研究に取り組んできました。その分野に引き寄せた場合、大学の社会に対する貢献、社会の課題とのからみあいをどう考えていくか。今回のパネルディスカッションでは、ここを改めて議論してみたいと思います。とりわけ地域、コミュニティとの関わりに焦点をおいて考えてみたいと思います。

地域、コミュニティとは、何かつながりをもって共通の利害関係があるという意味合いで考えるとかなり幅広い言葉で捉えられます。たとえば悩みをもっているということにつながっている人々も一種のコミュニティです。同じような悩みをネットで分かち合う、近くにいる人だけでなく、いろんな人とつながりあうという意味で考えますと、コミュニティはずいぶん広い意味合いになります。一方で、地域という言葉を地理的な意味合い、ローカリティと考え、その近くにおいて、その場で一緒に対応することとして考えます。たとえば先ほどの基調講演でご紹介いただいた、最上川プロジェクトなどはまさにそのような

取り組みです。

このようなことから考えますと、人間科学研究所としては、対人援助に関わる課題をもつ人たちと社会の中で何をするかという面と、京都の地に拠点がある研究所が近隣の個人・組織と一緒にどう取り組んでいくかという、二つの側面がコミュニティについて問われているのではないかと考えています。本パネルディスカッションでは、後者の方に重点をおいて議論をしていきます。

最初にパネリストからご報告をいただき、報告にかかわる質疑応答を行い、その後以下の論点にそって議論を進めていきます。論点1は、大学がもつ資源とは何か。実際の活動の中で、どういうことが役立っているかです。論点2は、大学資源の地域による活用であり、大学は地域でどう使われてきたか、という主題です。3つ目は、今後どうするかという展望についてです。

こういう主題を議論するには、大学だけではなく、京都の行政の方や地域の方を交えてパネリストになっていただくのが筋ではないかと思いますが、今回は、研究所の活動を活性化することも含めて、それぞれがどういうことをやってきたか、互いにつきあわせて議論する中で、地域とのかかわりを研究所の組織として議論し、今後の議論につなげていきたいと思っております。